

若桜橋この頃

奈良 敏行



最近ふと子供の頃に読んだ「杜子春」という小説を思い出す。唐王朝の洛陽の都、ある日の夕暮れどき西門の下に杜子春という若者が佇んでいた、というところから始まる物語だ。話の展開は子供ながら不条理な顛末だと首をかしげるところがあった。

思い起こすところがあったのは、たわいのない不条理性でなく「西門の下」に佇むという光景だ。路上といってもいい場所なのだろう。路上が膨らむと広場となり市となる。

そういうことを空想したのは市内中心部を流れる袋川にかかる若桜橋の橋上に佇むときだ。風景が美しいので散

歩の折に一息つく場所だ。杜子春は零落して西門の下に佇む、わたしは「縮減」してこの橋の上に佇む。杜子春はここから物語が始まるのだが、わたしの物語は終わってしまった。杜子春はあれこれあって、結局泰山の麓に一軒の家と畑を与えられる。一方的な贈与ともいえる幸運だ。わたしは四十三年の欲望とオブセッションの牙城であった定有堂ビルを手放し、幸運にも小銭を手にすることができた。そして手放したはずの定有堂ビルの一室を与えられる果報を得た。西門の下、若桜橋まで歩いて一分だ。与えてくれたのは鉄冠子という仙人だ。一方的な贈与を面白がる老人がいたのだ。わたしの泰山の麓は西門の下（若桜橋）と目と鼻の先だ。

この若桜橋の通りは、かつて商店街という市が栄えた通りだ。縮減して欲望もオブセッションもおぼろになったわたしは、この通りを目的もなく歩くのが楽しみだ。消えたり生まれ替わりの生成変化を止めない、通りの鼓動が心地よい。閑散としたコンビニの店内のカウンターでコーヒーを飲む。この場所で物思いにふけるのが大切なひとときだ。定有堂が始まった一九八〇年には全盛期の記憶が忘れ去られていたが、ロゴスという書店がこの通りにあった。定有堂の「定有」という哲学用語が奇態だと悩んだわたしにお婆あきさんが、「この町にはロゴスという大書店があっ

たのだから、定有は恥ずかしくない」と背中を押してくれた。結果それはとても大事な決断だった。

わたしはこのロゴスという書店には遅れてしまったのでその実像はわからない。でもなにかを継承したのではないかと思いつけていた。いまはロゴス文化会館という建物が残っている。今年の夏前に、その二階フロアーを借り切って集会所を始める老人が現れた。浜本仙人だ。白い壁面に囲まれた清潔な空間だ。「交流ポラーナ」という。「新聞を読む会」とか「詩の会」がある。「詩の会」講師は井上嘉明仙人だ。わたしも仙人修行のような気分での会に足を運ぶ。

第一回が石垣りん、第二回が茨木のり子、第三回の九月十三日(二〇二四)は一転して「カフカ」だった。仙人の集まりだから耳が遠い人も多い。聞くよりもしゃべることが楽しい会なのだ。主宰の浜本仙人もはつきりとそう明言する。県民文化会館で行っているわたしたちの「読む会」なら五分で済む話を嬉々として二十分に引き延ばして話す。カフカ論に入ることなく井上仙人がチェコにカフカの遺跡を訪ねた話で二時間が終わった。しかも三回も行っているのだ。話是否応もなく盛り上がる。浜本仙人もきりげなく僕も行ったよという。体験のスケールの広がりがこの人たちの身に備わっているのに驚いた。

わたしは「言葉」で押していく方だが、この詩人は「ことば」を語る。わたしはこの町で終わりを迎え、終わりの余韻を杜子春のように楽しむ。これが泰山の麓でなくて何だろう。

定有堂ビルの二階の自室の前には十坪の本屋がある。「何か面白いことない？」と言って店主の顔を見に行く。終わった本屋と始まった本屋の掛け合いがある。終わったのだが続いているような錯覚を覚える。昨日は平台の『ハーレムの熱い日々』が目にとまった。「これは何でここにあるの？」と聞いた。近しい親類が帰省して本屋を見聞にくるので、彼へのサプライズとして急遽仕入れたのだそうだ。当然目に飛び込んだのだが、この本を若い頃に読んで、いまの海外を股にかける仕事に就いたと初めて秘話を語ってくれたそう。すでに持っているので購入にはつながらなかった。しかし、その熱い思い出とともにわたしが持ち帰った。ここでしか買えない本だ。

カメラ一つをかかえた若い女性の路上(西門の下)の物語だった。一九六二年のハーレムの路上は「熱い」。「縮減」したわたしの「ここ」にあるのは一九六〇年代のリストアートだった。杜子春のリストアートに思いを重ねる。子供の頃のわたしは、忘れていたが芥川が好きだった。詩人の井上仙人に「なぜカフカだったのですか？ 詩人であるご

自分とどのように交錯するのですか？」と聞いた。「不条理」、とこのときだけは鮮明に答えられた。言葉では語りにくい。だから「ことば」を積み上げるのだと知った。わたしは別の空間と時間に分け入りつつあるのをうれしく思った。

2024.09.17

(参考)

芥川龍之介 『蜘蛛の糸／杜子春 改版』 新潮文庫
2010

吉田ルイ子 『ハーレムの熱い日々』 ちくま文庫
2024